

# 日産科学振興財団 理科 / 環境教育助成 成果報告書

回次：第 **3** 回 助成期間：平成 **18**年 11月 1日～平成 **19**年 10月 31日

テーマ：園内外の環境を通じた自然を体感する教育

氏名：佐伯 妙有 所属：伊勢原ひかり幼稚園

## 1. 課題の主旨

本園では、子どもの五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）に響く直接体験を通して、生きる力を育てることを目指している。

幼稚園にあるビオトープ、田んぼを中心に園内外の身近な自然に関わり、生命の不思議、命の大切さ、収穫の喜びなどを体験する中で社会性、創造性、表現力、思いやりの心を育む。

この体験を通して、物に取り組む意欲、何かを知ろうとする力、自然環境のありがたさを感じる心が芽生え、広がることをねらいとする。

## 2. 環境

子どもたちは、園庭にあるビオトープや田んぼにいつでも関わることが出来る。

その他に、銀杏、シイの木、クルミ、楓、桜、サルスベリ、やまもも、ふじ、あけび、ケヤキ、ひめしゃら等、様々な実や花や葉にふれあえる木々がある。

園庭の端には、季節によってたんぼぼ、ツクシなどの自然の草花や、かまきり、コオロギ、バッタなどの昆虫もやってくる。

また駐車場をはさんだ西側には年間を通して、ジャガイモ、サツマイモ、落花生を育てていて、自分たちで収穫して食べている。

園の外は、南と東は住宅地、北と西は畑や森に囲まれている。ビオトープの生物たちも周りの自然と園内の自然を行き来している。



## 3. 活動内容

春、たんぼぼやナズナ（ペンペン草）が生え始める頃、庭のビオトープにもヒキガエルがやってくる。おしから長いゼリー状の卵を産み落とし、ビオトープの片隅にとぐろを巻いている。子どもたちは卵からおたまじゃくしとその変化に直に接する。春の草花に触れながら、草笛を鳴らしてみたり、ナズナで音を鳴らしてみたり、風のぬくもりの違いを感じたりする。

5月になるとサツマイモの苗植えや籾蒔きが始まって、6月は田植えの時期。5歳児は泥の感触を味わった後、田植えをする。苗が少し伸びた頃に今度は、田んぼにあまがえるが卵を産んでおたまじゃくしが泳ぎ出すと捕まえて部屋で観察するようになる。

この時期からビオトープには、色々な生物が来てはいなくなったり見えなくなったりする。ザリガニ、ミジンコ、ゲンゴロウ、まつむし、めだか、どじょう、アメンボ等が活発に活動を始めると子どもたちのふれあいも多様になる。

6月には3月に植えたジャガイモ掘りがあって、ほったジャガイモをカレーにして食べる。ザリガニを捕まえて部屋で観察するようになる。そこから造形活動にも広がった。

7月には5歳児の一泊保育の活動からタネをプレゼントされる。なんだかわからないままに栽培を始めるが、それだけに興味が尽きない。少し芽が出ただけで大騒ぎ、自分たちで観察日記を付けようということになる。

9月になると田んぼは稲が育ってきて、徐々に穂をたれてくる。ビオトープでも生き物は少なくなって、トンボが盛んに飛んでくる。しばらくするとヤゴがたくさんみられるようになり、アメンボが増えてきた。庭のシイの木にはどんぐりがたくさんついて、落ちたどんぐりで楽器を作って遊んだ。また庭のあちこちでバッタやかまきりを捜す子どもたちが増えてくる。5歳児の観察日記からどんなものができるのか、想像画がはじまる。

10月になると、稲刈り、落花生掘り、さつまいも掘りと収穫の季節。稲は干して、落花生は茹でて食べ、さつまいもは焼き芋にする。この頃5歳児のタネが赤カブになり収穫して食べる。

11月になると稲の脱穀をする。千歯こぎで脱穀をした後、一升ビンの中に籾を入れて棒でつついて精米する。この頃になると落ち葉や、木の実を拾ってくる子が増えてくる。園外へも出かけて造形活動の材料探しもしてくる。

12月には、精米したお米（餅米）で餅つきをする。

1月には、お米の粉でお団子作り、2月までの寒い時期には、園庭の川に出来た氷で遊ぶ姿も見られる。

3月にはじゃがいもの種芋を植える活動が始まる。この時期からヒキガエルが動き出してビオトープに卵を生みに来る。

#### 4. 活動内容の考察、成果

それぞれの時期で子どもたちは、自然を通じた活動に体全身でかかわり、又四季の移り変わりを肌で感じている。教師は子どもたちとその場を共感し、それだけではなく新たな気づきのきっかけ作りをしてきた。春の草花に触れて、草から音が出る時の子どもたちの驚き、葉っぱと葉っぱがこすれ合うときの音を感じたときの嬉しそうな顔。カエルの卵をさわったときのぬるっとした触感、ザリガニをどうやって持ったらはさまれないか試行錯誤するときの真剣な表情からザリガニを表現するときの楽しそうな表情。ビオトープの水をすくってみたときにたくさんいるミジンコに心を奪われてじっと目をこらす様子。おたまじゃくしを部屋で飼っていたときに、足が出てきたことに感動して絵を描いて「おめでどう」のメッセージ送る子。これらの体験の中で生命の不思議さや、命の大切さを体感した。また驚いたり感動したり好奇心がわき起こることから本を見て調べようとする気持ちが出てきたり、教師にいろんな事を聞いてくるなど、ものごとに積極的に取り組もうとする意欲も高まってきたようだ。そんな思いを教師の働きかけで表現活動に結びつけると、さまざまな思いを表現するようになった。

稲、ジャガイモ、サツマイモ、落花生などを育て、収穫し食べる過程において、畑や田んぼの土の感触や、それぞれ、どんなものを植えるのか、どんなふうに育つのか、どんな形なのか、どんな手触りなのか、どうやって食べるのか、どんな味なのか、どんなにおいがするのか等、活動の中で子どもたちがどう感じていくか、教師がどう共感していくか、何気ない言葉で感覚的に感じていることを意識化させてあげることが必要だと感じた。その過程で友達と協力すること、友達を思いやること、食物の大切さなどを感じ取ってくれることを望んだ。

## 5. 今後の課題と発展

ビオトープを充実することと、近隣の施設との関連を深め、子どもたちの活動も環境を意識したものに発展させていきたい。今回は園内での活動が主であったが、地域の環境を含めて子どもたちの生活の場を広げることによってより多くの違った経験が出来るように努力していきたい。